

日蓮大聖人御書全集

じゅりょうほんとくいしょう

寿量品得意抄

新版

2141

ς

2143

じゅりょうほんとくいしょう

寿量品得意抄

きょうしうしゃくそん じゅりょうほん と にぜん しゃくもん 聞
教主釈尊、寿量品を説き給うに、爾前・迹門のきき
舉 のたま いま いっさいせけん てん にん あしゅら みな
をあげて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、
いま しゃかむにぶつ しゃくし みや い がやじょう さ
今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠
どうじょう ざ あのくたらさんみやくさんばだい え
からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり
おも うんぬん とお
と謂えり」云々。

この文の意は、初め華嚴經より終わり法華經安樂行品
もん こころ はじ けごんぎょう お ほけきょうあんらくぎょうほん
いた いつさい ほとけ みでし だいぼさつとう し
に至るまで、一切の仏の御弟子、大菩薩等の知るところの
おも しんちゅう おも
思いの心中をあげたり。

にぜん きょう ふつ とが いち ぎょうふ そん ゆえ 爾前の經に二つの失あり。一には、「行布を存するが故に、
なおいまだ權を開せず」と申して、迹門方便品の十如是の
いちねんきんぜん かいごんけんじつ にじょうさぶつ ほうもん と とが に
一念三千・開權顯実・二乗作仏の法門を説かざる過なり。二
しじょう い ゆえ
には、「始成を言うが故に、なおいまだ迹を發かず」と申し
くおんじつじょう じゅりょうほん と と
て、久遠実成の寿量品を説かざる過なり。この二つの大法
いちだいしょうぎょう こうこつ いつさいきょう とが ふた だいほう
は、一代聖教の綱骨、一切經の心髓なり。
しゃくもん にじょうさぶつ と しじゅうよねん ふた とがひと
迹門には、二乗作仏を説いて、四十余年の二つの失一つ
だつ じゅりょうほん と
を脱したり。しかりといえども、いまだ寿量品を説かざれ
まこと いちねんさんぜん 頓
ば、実の一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水
みず

宿

つき

ねな

くさ

なみ

うえ

う

こと

にやどる月のゞとく、根無し草の浪の上に浮かべるに異ならず。また云わく「しかるに、善男子よ、我は實に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文の心は、華嚴經の「始めて正覺を成す」と申して始

めて仏になると説き給う、阿含經の「初めて成道す」、

淨名經の「始め仏樹に坐す」、大集經の「始めて十六年」、

大日經の「我は昔道場に坐す」、仁王經の「二十九年」、

無量義經の「我は先に道場にして」、法華經方便品の「我は

始め道場に坐す」等を、一言に大虚妄なりと打ち破る文な

はじ どうじよう ぎ とう いちごん だいこもう う やぶ もん

このかた むりょうむへんひやくせんまんおくなゆたこう とううんぬん

われ じつ じょうぶつ

はじ しうがく じよう もう はじ じようどう

はじ じよう はじ じよう はじ じゆうろくねん

はじ じよう はじ じよう はじ じゆうろくねん

はじ じよう はじ じよう はじ じゆうろくねん

はじ じきょう われ むかしどうじよう さ にんのうきょう にじゅうくねん

はじ じきょう われ さき どうじよう ほけきょうほうべんほん われ

はじ じきょう われ さき どうじよう ほけきょうほうべんほん われ

はじ じきょう われ さき どうじよう ほけきょうほうべんほん われ

り。

本門寿量品に至つて始成正覺やぶるれば四教の果やぶ
れ、四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ。因とは修行、
弟子の位なり。爾前・迹門の因果を打ち破つて、本門の
十界の因果をときあらわす。これ則ち本因本果の法門なり。
九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界にそなえて、
実の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

こうしてかえつてみるときは、華嚴經の台上盧舍那、
阿含經の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明經・
阿含經の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明經・

あみだきょう だいにちきょうとう ごんぶつとう じゅりようほん ほとけ てんげつ
阿弥陀經・大日經等の權仏等は、この寿量品の仏の天月
のしばらくかげを大小のうつわものに浮かべ給うを、
しょしゅう ちしゃ がくしようとう ちか じしゅう 惑 とお
諸宗の智者・学匠等は、近くは自宗にまどい、遠くは
ほけきょう じゅりようほん ちか じしゅう とお
法華經の寿量品を知らず、水中の月に実月のおもいをな
すいちゅう つき じつげつ 思
して、あるいは入つて取らんとおもい、あるいは縄をつけ
てつなぎとどめんとす。これを天台大師、釈して云わく「天
げつ 繫 留
月を識らず、ただ池月のみを観ず」と。心は、爾前・迹門
しゅうじやく もの かん こころ にぜん しゃくもん
に執著する者は、そらの月をしらずして、ただ池の月を
しゃく
のぞみ見るがごとくなりと釈せられたり。また僧祇律の文
そうぎりつ もん

に「五百の猿、山より出でて、水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが、実には無き水月なれば、月とられずして水に落ち入つて猿は死にけり。猿とは、今の提婆達多・六群比丘等なり」とあかし給えり。

一切経の中につきの寿量品ましまさづば、天に日月無く、
國に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがごと
し。されば、寿量品なくしては一切経いたずらざとなるべ
し。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠からず。

親無き子は人にいやしまる。詮づるとこゝろ、寿量品の肝心

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經こそ、

じっぽうさんぜ

しょぶつ

はは

おわ

そうちら

きょううきょううきんげん

候え。恐々謹言。

にちれん

かおう

日蓮

花押

四月十七日